

沙甸村の殉教者記念碑

楊 海 英

中国雲南省の南に沙甸さてんという小さな村がある。省都の昆明から南へ約二〇〇キロメートル離れたところであり、距離的にはベトナムに近い。雲南の人々は近代に入ってから北の中国内地よりも南の海への出口を求めて鉄道を造った。ベトナムのハイフォンに通じる鉄道は蒙自という都市を通るが、この蒙自市のすぐ北方に沙甸村がある。一九七五年にこの村で人民解放軍による大量虐殺事件が起こった。私は二〇一二年八月七日に村に入って、現場を見てまわった。

沙甸が世界に知られているわけ

沙甸村の住民はイスラームを信仰する敬虔なムスリムたちだ。イスラームが雲南に伝わったのは、

モンゴル帝国の元朝時代のことだ。モンゴル帝国は雲南の政治運営を中央アジアから移住してきたムスリムたちに任せていた。元朝が滅んだあと、彼らは地元元朝の住民と通婚をかさねながらも信仰を固く守り通した。そのため、中央アジアのアラビア語やトルコ語は次第に忘れられたが、中国語を母語とするムスリム集団が少しずつ形成された。中国で易姓革命えいせいが起こり、王朝が交替するたびに、彼らは抑圧の対象にされた。中国人の明朝と満洲人の清朝それに中華民国時代にもムスリムたちの政治的地位は低かったが、もともと熾烈な弾圧を加えたのは中華人民共和国である。過酷な弾圧は、大量虐殺の形で現れた。一九七五年七

月二日から七日八晩にわたって殺戮が断行され、およそ二〇〇〇人が犠牲になった事件は世界を震撼させた。

昆明市発の蒙自市行き長距離バスに六時間揺られて沙甸村についた。村の入り口に奇妙な真新しい建物がある。なんと中国の国旗がモスクの上にはためいているのではないかとよくみると、「中国共產党個旧市沙甸区公所」とある。区政府の建物を完全にモスク風にしてたものだ（写真1）。それにしても、円形のドームの上に赤い五星紅旗が差し込まれているのはやはり共産主義とイスラームの共存を思わせる組み合わせだろう。私は一九九一年から中国西部部のイスラーム地域を広く歩いてきたが、モスク風の党政府機関の建物は初めてである。

ユニークな区政府の門前を若い女性たちが颯爽とバイクに乗って通る。みんなベールに体を包まれ

ており、なかには頭髪をすつぱり覆うヘジャブをかぶった少女もいる。片手に携帯をもち、ショートメールを入力しながら歩いている若者も多い。

「沙旬村大清真寺はどこにあるのか」と私は少女に道を尋ねた。モスクはすでにそこに見えているが（写真2）、コミュニケーションのために話かけてみる。細い体を真っ黒なベールで覆い、さらにピンクのヘジャブをかぶつてい



写真1 モスク風の沙旬区公所

る。両目しかみえないが、ややブルーの瞳がとても美しい。

「すぐそこよ」と彼女は指してから、案内してくれた。壮大なモスクの前に若者が十数人たむろしている。彼女もそのグループに加わっていった。デートだろうか。

殉教者の記念碑

モスクの両側に「愛国」と「愛教」という看板が立っている。ムスリムも祖国は中国で、中国とイ



写真2 沙旬村大清真寺

スラームの双方を愛し、宗教と共産主義を両立させよう、という趣旨の洗脳教育が徹底されているシンボルだ。中国全土のイスラーム地域にみられるプロパガンダのスローガンだ。最近では、内モンゴルやチベットでも強制されている。

「記念碑に行きたい」とタクシールの運転手に言った。「シャヒードとは犠牲者や殉教者の意だ。連れて行ってあげよう、と話してアクセルを踏む。モスクから数分程度のところにある村の北側の山の斜面に立っている。イスラームに関心があって、沙旬村虐殺事件を調べに日本からきたと話すと、「是非詳しく書いて日本にも広げてください」と運転手に励まされた。そして、タクシードもいらないと固辞する。彼なりの心配りだ。

シャヒード記念碑を目指して広大な墓地に行く。イスラームは土



写真3 シャヒード記念碑
(写真は全て2012年8月筆者撮影)

葬を営む。新しい墓も多い。一人で歩くのはやや陰惨な気分になる。まず、一番目の小さなシャヒード記念碑にたどりついた。事件の経緯を簡単に記した漢文があり、虐殺の責任を毛沢東の夫人江青らにゆめる「四人組」に帰した内容だ。ここからさらに石畳の階段を登って行くと、もうひとつ、巨大なシャヒード記念碑が聳え立っている(写真3)。正面の壁に「満江紅」という題の漢詩があり、血腥い虐殺を悲しんだ内容だ。記念碑の下部台座には殉教者の名前九〇〇人分が刻まれている。

る。事件の概要を簡素にまとめたアラビア語もある。記念碑は二つあるということだ。記念碑を詳しくみてから離れようとしたとき、王という七〇代の老人が孫と一緒にやってきた。「上墳」、つまり墓参りにきたという。親戚の者が解放軍に殺されてここに眠っている。自分は運よく生き残ったが、家は砲撃で全焼したという。ほぼ毎日のように墓参りしていると話す。

世界のムスリムたちはいま断食祭の最中で、町のレストランも夕方にならないと営業しない。

新疆ウイグル自治区の昌吉回族自治州から来たという回族の若い夫婦の店に夕刻に入る。昌吉回族自治州には私も一九九〇年代に何回も行ったことがあるので、話は盛り上がる。夫は沙甸村のイスラーム学校で学んだ経験から、気候温暖なこの沙甸が気に入ったという。それよりも、新疆ウイグル自治区ではあまりにも過酷な宗教弾圧の政策が実施されているから、自由を求めて沙甸村に移住してきたと語る。

回族の夫婦と語り合っていると、悠長なアザンが伝わってきた。夕方の礼拝の呼びかけだ。男たちはゆったりと沙甸村の大モスクへと向かう。私も彼らの祈りの風景を遠くから眺めてから旅館を目指した。今度はウイグル人の青年が運転する車だ。彼もまた自由のない新疆ウイグル自治区から新天地を求めて沙甸村に来た一人だ。ウイグル人たちが自らの故郷

において後からやってきた中国人によって自由を奪われている事実は南国の雲南省にいてもひしひしと伝わってくる。

ムスリムの集団的な記憶

次の日の早朝も、私は礼拝の呼びかけで目が覚めた。私はムスリムではないが、なぜか心の底からアザーンが大好きで、実に爽やかな気分になる。

朝一番に例のモスク風の区政府の建物を目指した。ここで、ワンリーピンという沙甸村の副書記と会う約束をしていた。雲南大学の知人らが紹介してくれた方だ。知的な女性で、村の歴史にも詳しいという。ラマダン中は日中に食事を取らないだけでなく、信心深いムスリムは唾を飲み込むこともしないので、インタビューも一時間以内にしたほうがいい、とのアドバイスを受けた。ワンリーピンさんは客の私にお茶を出してくれ

た。しかし、ラマダン中なので、私も口にするのを遠慮して、話を聞いた。

私は一九六八年生まれだが、あの戦禍を経験している。私の家は兄弟姉妹六人で、七歳になつていた私はいまでもあの戦禍を昨日のこのように覚えている。我が家では母親があのときに殉教した。村は七日八晩にわたって砲撃された。焼夷弾やガソリン弾が数えきれないほど撃ち込まれた。

砲撃されるとみんな建物のなかへ逃げ込む。しかし、建物は瞬時に燃え上がり、あたり一面が火の海となった。母はベッドの上で砲弾にやられた。姉や妹たちを守ろうとしていたのだろう。母につづいて姉も殉教し、父は両目を失った。目の前で、ガソリン弾に打たれて炎に包まれて殉教していった子供たちを

私は何人も目撃している。

シャヒード記念碑に刻まれた九〇〇人は名前が確認できた分だけだ。あの時代、どこの家にも子供は最低四く五人はいた。一週間以上にわたって殺されつづけたので、一家全滅の例もたくさんある。記念碑に名前を記そうとしたときに、生き残った我々は大人の名は覚えていますが、殺された子供たちの名前は知らない。あのシャヒード記念碑にあるのは、約半分の犠牲者の名前だ。

ワンリーピンさんは静かに語る。彼女はムスリムの言葉で犠牲者を殉教と表現している。

なぜ、沙甸村のムスリムたちが中国共産党から虐殺の対象に選ばれたのだろうか、と私は尋ねた。

原因は二つある。ひとつは宗教弾圧で、もう一つは貧困化だ。

一九四九年以前の沙甸村は物が豊かで、信仰の自由もあった、幸せな桃源郷だった。社会主義制度ができてからまず、宗教が完全に否定された。宗教は麻薬だといひ、信仰してはいけないと命令された。一八歳未満の者はモスクに行つてはいけなし、大人も信仰を放棄するよう強制された。そして、村民には豚の飼育も強制された。つまり、イスラームが忌避することをわざとムスリムたちに強要することで、宗教信仰を否定するという政策が強制されたのである。私たちは生まれたときからムスリムであつて、小さいときからモスクに通うというよりもモスクで育つようなものだ。それが禁止されるというのはやはりとても受け入れがたいことだつた。

そして、貧困だ。食べ物がまつたくなかつた時代だ。何年

も不作がつづき、わずかな収穫も国に強制的に徴収されてしまひ、農民の手に食糧が残つていなくなつた。そこで農民たちはこつそりと物々交換をしたり、換金作物をどこか遠いところで隠れて作つたりしていた。これが政府にばれてしまひ、資本主義の復活がすすんでいると判断された。政府は工作隊を村に派遣してきて、村民を監視下に置いた。

工作隊はモスクに進駐し、そこで寝泊まりしていた。彼らは豚肉を食べてから、その骨をわざわざ村の井戸のなかに放り込んだ。村民たちも仕方なく豚の飼育はしていたが、食べることはしなかつた。生活用の井戸に豚の骨が投げ込まれたことで、もはや我慢できなくなつていた。村民たちは昆明市に出向いて省政府に陳情したが、逆に政府は村で反革命の暴動が計画さ

れている、と判断した。「二四時間以内に反革命暴動を片付けろ」と解放軍に出動命令がくだされた。ここから、大量虐殺がスタートしたのである。

抑圧の時代でも、人々は静かに、強く信仰を守つていた。虐殺から生き残つた村民たちは蒙自市に連行された。若者たちは政治学習班に入れられ、洗脳教育を受けさせられた。家族を殺されたあとも、犠牲者たちは「反革命分子」だとの政府からの結論を受け入れなければならなかつた。ワンリーピンさんも病院に入れられ、砲撃で受けた傷を治療した。

洗脳されつづけたが、虐殺の記憶が消えることはない。あそこらへんに立っている一〇代の少年少女でもあの虐殺のことはみんな知っている。被害者が出なかつたという家庭はない。こ

れは、民族の集団的な記憶だ。

ワンリーピンさんは窓の外を眺めながら話す。モスクの近くには大勢の少年少女たちが集まっている。昨日と同じ風景だ。

政府の規制を突破した情報

沙甸村での大量虐殺事件について、中国ではまだ研究が許されない状況だ。私も事件については著名なムスリム作家、張承志の著書『回教から見た中国——民族・宗教・国家』（中央公論社、一九九三年）から知った。事件は長く「反革命暴動」と歪曲されつづけてきたが、その後、馬萍氏の「解放军による沙甸の大量虐殺」（宋永毅編『毛沢東の文革大虐殺』原書房、二〇〇六年）が張承志よりも詳しく報告している。

中国政府が沙甸虐殺事件について厳しい制限を設けていても、インターネット上では多くの情報が

載っている。ワンリーピンさんも「中国ムスリム・ネット（中国穆斯林網）に沙甸虐殺事件に関する文章が多数ある。よく削除されるけれど」と教えてくれたので、日本に帰ってから早速アクセスしてみた。「中国ムスリム・ネット」には弾圧された側と、実際に虐殺に参加した人民解放軍の兵士ら双方からの回想文が掲載されている。

[msl] 卡夫卡（ムスリムのカフカ？）というペンネームの人物が二〇一二年二月二日に発表した文章（http://www.21com.net/articles/isd/lec/article_2012022254185.html）と、奥ス瑪が二〇一二年八月二三日に公開したレポート（<http://www.2muslim.com/forum.php?mod=viewthread&tid=394947,> いずれも二〇一二年九月四日閲覧）は事件の経緯を詳しく伝えている。以下はその要約だ。

雲南省革命委員会が派遣した約一〇〇〇人からなる人民解放軍の部隊は一九六八年二月八日に沙甸村に進駐した。彼らは神聖なモスク内で寝泊り、ダンスパーティを開いた。豚肉を食べて、その骨をモスクの井戸に捨ててわざとイスラームを侮辱した。また、ムスリムたちを集めて暴行を加え、豚の真似をするよう強制した。一九六九年一月三〇日の批判闘争大会では、六十数名ものムスリムが吊るしあげられ豚のように転がるよう命じられた。この日、妊娠していた女性がリンチされて流産してしまった。この時に、一人が殺害された。

一九七三年一〇月、ムスリムたちは政府の厳しい宗教否定政策を突破して、閉鎖されていたモスクを開けて、礼拝を始めた。政府はこれを「宗教の復活」だとし、「反革命集会」が

横行していると判断し、民兵を出して村を包囲し出した。

沙甸村側は馬伯華ら一〇人を選んで北京へと陳情に出かけたが、政府に無視された。政府はこの間に着々と武力による解決の準備をすすめていた。雲南省の指導者で、中国人の周興は「沙甸村には核兵器もあり、国民党のスパイらとともにイスラーム共和国を創り、民族分裂活動をしている」と北京に密告した。そこで、一九七五年七月二九日の早朝三時から武力弾圧が始まった。激しい砲撃のなかで村は火の海と化した。七日八晩にわたる攻撃の結果、四四〇〇軒の家が破壊され、九〇〇人余りのムスリムが殺された。当時の沙甸村の人口は七七〇〇人だった。

一方、鎮庄する解放軍側の記録は次のようになってい。于化民

という元兵士がつづった「沙甸村の反乱を平定する」という文章は、作戦命令は総参謀長の鄧小平が下したとし、解放軍の八〇五〇四部隊の三〇四連隊と三五三一部隊の砲兵六五師団、三五二一八部隊と空軍の三六九三部隊、それに第一四軍団が参戦したと書いてい (http://www.2muslim.com/forum.php?mod=viewthread&tid=76416&page=13#pid2925250)。別の劉長信という元兵士が二〇〇九年七月三十一日に公表した文章は以下のようにならえている。「沙甸の反乱した匪賊をやっつけるのは日本軍や国民党軍と戦うのと違う。ひたすら大砲を村に撃ち込めばいい。砲撃後の村はほぼ更地のように変わりはてた。我々は反乱分子を約一五〇〇人から一六〇〇人殺した」。このように、兵士たちは自らの軍功を誇示するような形で回想している。

別の人、ムスリムの馬紹美の証

言によると、八月四日、約一五七名の老人と女性、それに子供たちが仕方なく人民解放軍に「投降」した。両手を挙げて村のあぜ道を歩いていた時に機関銃掃射を浴びて、全滅した。即死しなかった者に対し、解放軍は逐一、「補足射撃」を加えていたという(馬紹美「沙甸事件概述」『沙甸回族史料』、内部史料、一九八九年)。

墓標なきモンゴルと真相解明

沙甸村の虐殺事件はその後、名誉回復され、「四人組の極左路線による結果」との見解が定着した。文化大革命を主導したのは何も四人組だけではない。「中国人民の偉大な領袖毛沢東」と「人民の良い総理周恩来」が最高の責任者で、彼らが運動をすすめていた。そして、宗教を敵視するのはそもそも共産主義思想そのものであって、四人組とは無関係である。言い換えれば、共産主義思想

とそれに基づく社会主義制度に根本的な原因があるにもかかわらず、大量虐殺の善後処理はみごとに問題の本質をすり替えている。

そして、沙甸事件に関していうならば、作戦命令も「改革開放をすめた開明政治家の鄧小平」が下したという点からみても、少数民族を強権的に支配しようとするのは、すべての中国人政治家に共通する特徴であると指摘できよう。

沙甸村にはいまも中国政府の工作隊が駐留しつづけている。表面きは村民の生活を向上させ、大量虐殺の後遺症に対処するためだという。実際は村民らの行動を監視し、特に猛烈な勢いで復興しつつあるイスラームへの信仰に警戒していると見られている。

私は沙甸村のムスリムたちの強い生命力を感じた。内モンゴル自治区でも文化大革命中に大量虐殺が長期間にわたっておこなわれた。政府の公式見解だと、およそ

三四万人が逮捕され、二万七九〇〇人が殺害されたという。当時のモンゴル人の人口は約一四〇万人だったので、平均して一つの家庭から一人が逮捕され、五〇人に一人が殺されていたほどの規模である。しかし、モンゴル人犠牲者の名前を刻んだ記念碑は一つもない。それどころか、事件について研究することも厳しく禁止されている。私はモンゴル人たちのそうした現代史的状况を

「墓標なき草原」と表現した（楊海英著『墓標なき草原』上・下、岩波書店、二〇〇九年、『続 墓標なき草原』岩波書店、二〇一一年）。ことさらにムスリムと漢民族、モンゴルと中国人との対立や殺し合った過去を強調しているわけではない。歴史は真相を解明してはじめて民族同士の和解が可能となる。虐殺の歴史をひたすら隠すだけでは民族問題の解決はあり

えない。

沙甸村の殉教者記念碑は、暴力を戒め、真の和解がいかに大切を示すモニュメントである。

〔付記〕本研究は日本学術振興会科
研費「社会主義中国におけるエス
ニック・ジェノサイドに関する実
証研究（課題番号…2225208
18、代表者…大野旭（楊海英）
の成果である。記して関係各位に
お礼申し上げる。